
神様の好奇心は人をも殺す

all

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の好奇心は人をも殺す

【Nコード】

N8263Y

【作者名】

all

【あらすじ】

神様の好奇心によって殺されたも同然の高校2年生の神坂望。責任を感じた神は望を異世界に転生させた。そう望が四六時中していた「妄想」を現実にできる世界に。

プロローグ ・ 異世界への転生 ・ (前書き)

始めまして、小説始めました。

このような執筆作業は初めてなので誤字や日本語としておかしい部分が多々あるかもしれませんが生暖かい目で流すように読んでいただければ幸いです。

プロローグ - 異世界への転生 -

彼、かみさかのぞみ神坂望はいつものように歩道を歩き交差点で止まり、信号が青になったらまた歩き出し、学校へ向かう。

朝の7時半。朝日を体に浴びながらいつものように同じ道を歩きたいつものように学校につく——はずだった。

事は学校の裏にある信号のない小さな交差点で起こった。

「それ」はまるで十字路を渡る望が見えていないかのようなスピードでこちらに突っ込んできた。

横によけては間に合わない、「判断」した望は四六時中やってたいた妄想どおりに体を動かす。

ボンネットに手を付き、体を浮かせ、背中に背負っていたカバンをフロントガラスに打ち付けるようにしてダメージを殺す。

（妄想成功！）

ガッという音が響き、ボンネットの上に体を預け——「それ」がスピードを落とした。

「それ」いきなりブレーキが効いたかのようにスピードが落ちた。慣性の法則により打ち出され大通路にでてしまう。

次の瞬間、トラクションの音が鳴り響きその中に鈍い音が混じっていた…。

これが神坂望が異世界に転生することとなった世界で最後の出来事である。

この世界の神様はあまり人間に手を出すことはなかった。

というよりもともと興味があんまりなかった。

しかし世界に常識があつて非常識があるのなら、神世界しんせかいでも非常識と呼ばれる神はいるものである。

そしてその神の世界での非常識と呼ばれる神は望の妄想を知り、面白がり、試したのだ。

人間とはどこまで「準備してある物事」に対処できるのかと。

つまり、望がいつも通学路でやっている「どうやってからいよくかわすか交通事故の対処法」という現実味のある妄想を現実に引き起こしたのだ。

運転手から望の姿が見えなかったのは神のいたずらであり、それが結果一人の人間が逝った。

神は責任を感じた。神のいたずらは一人の人間の、いやその周りの人間も含めて全員の未来を狂わせたのだ。

家族友人はもちろんのこと、クラスメイトや担任の先生等は十分に周りの人間に該当するだろう。

望は転生者に、そして神は祈った。

そしてその神は世界に手出しすることを自ら禁じそれ以降世界をのぞこうともしなかった。

その神が上位神によって「天罰」を受けたのはどうでもよく、知らなくてもいい現実。神世界

重要なのはこれにより望という転生者が生まれ、異世界で生きていくことになったということ。

そして、望は異世界で二度目の人生を生きるということである。

神がその異世界での生活を見守っていたのも彼にとっては知らない、知らなくていい現実。

ブログ ・ 異世界への転生 ・ (後書き)

転生物を多く読み流されるように書き始めてしまいました。
投稿は不定期です。

神坂望改めエリック・シルフィールド三歳（前書き）

異世界は基本、絶対基準が私の妄想であるためこの筆者が生きている世界と発展の仕方が違うのはご了承ください。

つまり、世界と異世界では思考の仕方が違うため基本となる常識が異なっています。

極端な例にするなら「人間と精霊では考え方が違う」みたいなものと同じです。

攻撃方法、つまり世界で「妄想」した魔法での戦い方と異世界の魔法での戦い方は違う。

さらに言えば食生活で食べ物を腐らせる（醗酵）ということを考え付かなくてもなんら不思議ではないということです。

結論として、この小説の異世界の人間はこちらの常識では計れないということ。

さらに言うなら登場人物は人間ではない、もしくは人間に似た動物と考えていただいても結構です。

なのでこのことを踏まえてこのページでの画面スクロールをお願いします。

それでは転生というアドバンテージを持った精神年齢高校生から始まる「妄想が日常」の神坂望の日常をお楽しみください。

神坂望改めエリック・シルフィールド三歳

転生者

転生の言葉の意味としては、前世の知識を持ったままもう一度人に生まれること。これには動物を含めて転生する説もある。

ここでは、転生者とすることで人が人に生まれることを指すことにする。

そして、転生者はそれだけでアドバンテージになることが多い。

転生先が異世界であったり、現在の世代より古ければ古いほど技術や人の精神や考え方が発展していないためである。

未来に生まれたってその未来の人たちと常識が違うのだから新しい発見が可能かもしれない。

もう一つ、転生者にとって決定的なアドバンテージがある。

なにせ生命が生まれた瞬間から自我の確立ができているのだから…。

三歳になった。

昨日誕生日だった。

特に何をするわけでもなくただ生きている。

要するに退屈なのだ。

いや少し違うか、興味をそそるものがないのだ。

いやこれも少し違う。

興味あるものに触らせてもらえないのだ。……うんしくりきた。

毎日自分の部屋から外を見るだけ。

自分の家族が住んでいるところはたぶん高級住宅地。

家に面している通路は歩いている人たちは少なく逆に馬車とかが多かった。

大通りが少し見える。人とか露天とか、沢山いて沢山あった。

人ごみは前世では嫌いだったけど今じゃ地下鉄の混み具合が懐かしい。

うん、暇だ。

成熟したとはいえない、高校三年生未熟な精神だがこれは常人だと発狂レベルですよ。

目の前に！体の中に！「魔法」や「魔力」と呼ばれる未知なる力が眠っているというのになーんで我慢せななんのか！

自分は生まれる前から意識はあった。今でも記憶はある。体の中に気味の悪い力が眠ってたのにも気づいた。

このことから自分に何らかの力があり、異世界に転生したのでは？と仮説を立てた。——結果その通りだったわけだが…。

まあ、その力のおかげか生まれるまではまるで油の浮いた砂糖たっぷりサイダーのプールに入っているかのような気持ち悪さだった。

その上、体は思うように動かないただじっとしてただけ。

いつ出産されるかもわからない、そんな状態ですつと我慢していた私。

あれは地獄だ…。いや地獄だった…。か。

毎回地獄を思い出してどうにかこの退屈と比較して「まだましだ」と思いながらも、さすがに限界だ。

その出来事きっかけが誕生日パーティーだ。

誕生日パーティーを両親が親戚や貴族を呼び祝ってくれたのだが、これがこれがまたまた面倒だった。

なんで三歳児が貴族の面々に挨拶回りせにやなんのだ！ともう内心何度叫んだことか…。

自分の子供を何かしらの分野で認めてくれているならさっさと魔法教えてくれよ…。

周りに同年代の子供はいないし完全大人だけの世界。

どうやら貴族たちへのサプライズみたいなものだったらしい。

いや、ここはどう考えたって子供の成長を促すために同年代の子供に会わせるべきだろう…。

言葉とかさ、まだぜんぜん完璧に覚えているわけでもないし発音も舌足らずだし、会話こなさなきゃ覚えらんないよ…。

どうか違うというか抜けていてずれているそんな自分の父親ダニエル・シルフィールドと母親サラ・シルフィールド。

両方結構めんどくさい性格をしている。それでいて結構な貴族である。

が、なんとというか人を驚かせる事に人生かけているような人だ。^{善人}_{悪人}

相手は本当に誰でもいい。騎士団長を相手にしたこともあるのだ。

時たまにある人物からサプライズの依頼が来ることもあるらしい。本業おろそかにしてない？これも本業のうち？

自分が巻き込まれなければドッキリカメラ映像を見ているようなも

のだった。

しかし、巻き込まれるとタチが悪いじゃすまない。

というか三歳児をサプライズの相手にするというその精神が知りた
いよ。

さらに、元いた世界世界に魔法があつて、こちらの世界異世界では魔法がある。

この違いだけでドツキリの部分がどれだけ前の世界と違うかわかっ
てくれると思う。

ああ、自分も早く魔法を使いたい…。

三歳になったんだから許してくれないだろうか？

あ、女から男になりました。

あーもう月ものとか考えなくていいから楽！
もう下のことなんて特に気にしなくなりましたとも！
ええ！気にしなくなりましたとも！

もう無意識でいいよ。

神坂望改めエリック・シルフィールド三歳（後書き）

名前が思いつかない。

名前だけに15分かかってしまいました…難しい。

精神は肉体の影響を受けると某吸血鬼Kさんが言っていたのを思い出しました。

言動は肉体に影響されていきます。でもやっぱり根っこの部分は女性で。

いけたらいいなあ。

台詞の掛け合いとかもぶつつけ本番。

読めるようなもの書けたらいいなあ。

妄想とかはもうちょっと後で。

魔法、魔力の勉強法？（前書き）

サブタイトルも難しい。

魔法、魔力の勉強法？

基本と応用

物事の「基本」というのは土台部分であり、その土台を固めていく必要がある。

建築物で例にするなら地中に埋めた基礎部分だろう。

応用は基本の上に積み上げる「モノ」であり、建築物の見た目部分にあたる。

なら建造物の間取り等の中身は？

経験である。

「親父！おれにまほうをおしえてくれ！」

「・・・あー、魔力の使い方なら教えてやろう」

「それってなにかちがいはあるの？」

「さすがにまだわからんよな」

わかってますけどね。

うん三歳なんだからこれぐらいがたぶんベスト。

違いが分かったらさすがにおかしいだろうし。

自分は両親が自分を転生者ということを知らないままでいてほしい。

特に理由はないし本当の息子として生まれてくる魂を押しつけた自分^{生者}に罪悪感を感じたことはないといったら嘘になるけど面倒事なんて極力避けたい。

破天荒な両親のことだからたぶんないとは思っけど放りだされる可能性が無い訳ではないし。

ん？日本語が微妙におかしい・・・か？

日本語の話し相手がいないからいつも自問自答しかしていない。

独り言が最近寂しくなってきた。

ま、閑話休題
それはそれとして

魔法に興味を持ち出すのは三歳からが多いらしい。

好奇心が高い時期だからだろうか。

いやーどうでもいいや！とりあえずテンション上がってキター！

「ん、よし。それじゃ始めよう。といってもどうしたもんか。」

「え？」

「…まあいいか。とりあえず俺の魔力を流し込んでみるからそれを外にはじき出してみろ」

「そとにだせばいいの？わかった。」

そういうと親父は手をつかんできて——いきなり寒気がしてきた。自分が別の何か、自分じゃないものに侵されていくようなそんな感覚。

自分が自分じゃなくなる——いやだ！

その時、バチン！と空気が震えて親父が数歩よろけた。

親父が青い顔でこっち向いてる。

あーやばいかも？なんかやっちゃった？

「…よ、よし。基本ができてるなすごいぞ。」

いや、今の基本が出来てたって顔じゃなかったよ？

今は仮面ボーカフェイスかぶってるのか平常に見えるけどあの顔は…おかしいよ。

「うん。ちょっと父さんは仕事があるからなまた後でな」

呼び止めるまもなく部屋を出て行った。

うん、逃げられた。

いや、逃げてくれてよかったかも。考えをちょっと纏めよう。

魔力の操作方法の基本は出来ている。終了。…じゃなくて

あの驚きっぷりから見ると基本以上のことが出来ているってこと。

魔力量が多かったのか魔力の操作使い方が上手だったとかそんなところ
だろうか。

前者はどうやって調べればいいのかわからん。自分しか基準がない
からなあ。

後者は後者でまたわからん。どれだけ滑らかに動かせるとかそんな
感じなのかな？

毎日やること本当になくて油の浮いたソーダ魔力に慣れることばかりやってたから
それが原因かな？

あとは子供ながらの成長力。高校二年生大人の精神と子供のなんじゃそりゃ本能力で成長が著
しいとかか？

まあなんにしても、魔法に対して転生者としてのアドバンテージが
出たところか。

転生者はやっぱりチートに入る域にあると思うんだ。うん。

三年間魔法の制御だけしかやってないんだから当然っちゃ当然なの
かも。

ほかにもこの世界、技術発展してないしお金に困るとは無いと思うけど、技術見せ付けて必要以上に目立つなんてこと、したくないなあ。

絶対妄想力豊かなどこそ馬鹿共に改良されてしまおうと思う。

んで戦争と。自分の発想が戦争に使われるなんてそんな後味悪いことしたくないなあ。

自衛のために使っちゃいますけどね。

んじゃ親父どのの反応を待つとしますか。

…いまさら不安になってきちゃった。

気づ^{転生}くわけがないと思うんだけどやっぱり少し不安になるなあ。

魔法、魔力の勉強法？（後書き）

主人公の特別は基本、あの世界での妄想とこの異世界に転生したことです。

もちろん知識もありますが。

基本の上には応用もありますけどね？

投稿時間は何時にしたらいいんでしょうか。

とりあえずまた19時におきました。

投稿は一週間に一回出来れば良いほうだと思います。
それでは次話で

父親の反応は家庭教師と専属メイド（前書き）

人によつては超大作のある生き物を思い出すかもしれません。
そのあたりはご了承ください。

父親の反応は家庭教師と専属メイド

能ある鷹は爪を隠す

狩をする鷹が爪を出していたら獲物に見透かされることの意味。

これを実行するには世界の常識と自分の常識を重ね合わせていつでも自制をしなければいけない。

ではまだまだ未熟な精神である私はいつまで自重することが出来るのだろうか。転生者

父が逃げた次の日

「はじめましてエリック様。私は魔法の家庭教師と呼ばれましたユアンです。どうぞよろしく」

「はじめましてエリック様。私はエリック様の専属メイドとなりましたアンナ・フリーエルです。これからよろしく願います」

父よ、私はあなたの反応を予測し切れなかったようです。予想外です。

家庭教師はうれしいんだけど…座学を三歳児からやらせるつもりか。

私は能力的問題ないと思うけど…自分の時三歳児って勉強したっけ？高校二年

………天才児として祭り上げられるのはごめんだしもっと自重したほうが良いね。

あと専属メイドか。

こっちはちょうど良いかも。

でも冷静に考えたら何で今？魔法を勉強するから？

…あゝ道徳みたいなものか。

つまり私の父親は道を踏み外さないように心の鍛錬もしようって画策したわけだ。

そういう心遣いはありがたい。

でもメイドなんてこの家で見たことなかったんだけど…。

専属メイドアンナさんの場合

「では、エリック様何なりとお申し付けください」

まさにメイド！っていうのが第一印象だったアンナさん。

艶やかな茶色の髪、キリッとした規則に厳しそうな目、出るところ出てはいないけどスレンダーと言っていていい体。

その直立姿勢で待機している姿はメイドさんそのもの。

似た目年齢二十代後半ぐらいかな？とか考えたらなんか寒気がした。
……あまり考えないようにしよう。

「えと、さっそくしつもんなんだけどメイドさんをこの家でいちども見たことないんだけど」

「それは当たり前でございます。メイドは主人の前に姿を見せずに仕事をする。その事を主人への礼儀としていますから」

え？

「それじゃあこの家にはいまだどれぐらいのメイドさんがいるの？」

「ダニエル様の専属を含めますと4人でしょうか。料理人を含めればもう少し増えますが」

つまり、もともとフリーは三人いて自分はその三人にまったく気づかなかったわけだ。

…なんか怖！

メイドさん侮りがたし。アキバの路上メイドとかとはやっぱりちがうね。

貴族なのに従者がいないのはおかしいとは思ってたけど、そんな理由だったんだ。

にしても自分専用か？なんかもつたいないね。自分の前世からの価値観はいったん崩壊させたほうが良いかも。

でもこれでメドが立った。両親とも忙しいしこれを頼むのは躊躇してたけど。

おっと、子供らしく子供らしくと。

「せんぞくつて自分だけつていみだよね？」

「はい。私はエリック・シルフィールド様の専属メイドです」

「それじゃあ、親に内緒にしてほしいことがあつてそれを言わないでいったら？」

「エリック様に危険がなければもちろんそれに従います。」

「ぜつたいに？」

「絶対でございます。運命と月の神ルナ様に誓つて。」

「それじゃあやりたいことがあるんだ…。」

家庭教師ユアンの場合

「では改めまして、このたびエリック様の家庭教師として呼ばれましたユアンです。よろしく願います」

「よろしくおねがいします」

こっちはー40代後半のオジサン…はちょっと失礼かもしれない。
でもそれぐらいしか浮かばない。

髪は金色でちよつと派手。顔は特徴がないね。

服装も魔法に関わっている人には見えないし…特徴のない40代か。
うん、一般人の40代のオッサンにしか見えない！あれ？さっきより印象悪くなつてないか？まあいいや。

「まほうのべんきょうつて何をするんですか？」

「はい。ダニエル様から多少駆け足でもよいので魔法の基礎を教えるように言われましたので…」

目の前にちよつと分厚い本が2冊ほど置かれた。

つてことはやっぱり座学ですか。

私って三歳児だよね？

あれ？もしかして文字読めるって思われてる？

「あの、まだ文字おぼえてないんですけど…」

「……………」

まあそうなりますよね！？

「…それではまず文字から覚えましょうか。最低限、日常生活に支障がない程度になつたら魔法を勉強するということだ」

「すみません親父が無茶を…よろしく願います」

文字は居心地の悪さと魔法への好奇心から二十日程度で覚えることが出来た。けど…

先生が顔を青くしてました。またやっちゃったよ…。

これからは七日に一回のローテーションで魔法の勉強をするとか。

本職が始まったらしい。

なんの職業かは教えてくれなかった。

魔法を勉強し続けてればまたあえるらしい。

そのまた会えるときを少しは楽しみにしていよう。

父親の反応は家庭教師と専属メイド（後書き）

台詞の時にエリックが父親を呼ぶときに「親父」になるのは男言葉
を少し間違っただけで覚えているから。

とか無駄設定考えるのは結構好きだったり。

母親は父親より忙しいという設定です。

初めてのお気に入りがありました。思わず小さくガッツポーズ。

専属メイドと家庭教師を得た五年後（前書き）

食べ物に関してです。

悩んだ末主人公は見た目ではなく味で食べ物の呼称を判断しています。

心の中では似たような味をした食べ物を前世の呼称でよんでいます。なので台詞の中にこの世界にはない固有名詞が出てくると思います。その場合基本、後書きにて説明させていただきます。

望^{日本人}が一応満足するぐらいには食生活は発達しています。

専属メイドと家庭教師を得た五年後

重力

万有引力とも言い、物体の重さを作り出す原因。

人間の体はこの重力という刺激によって体が作られていく——いや、重力に耐えられるだけの体を人間は作っていく。

しかし、骨や筋肉は重力という刺激があるからこそ育っていく。

では無重力状態ではどうなるのか。

宇宙飛行士は無重力である宇宙に出ると必ず運動を欠かさないという。

その理由は、常に重力による刺激がないため常に骨や筋肉が劣化してしまうから。

正確には人体の自己再生能力が低下してしまうのだ。

人体には体の組織を壊す細胞と再生する細胞がある。

この再生する細胞の能力が低下して破壊と再生のバランスが崩れ人体が常に劣化してしまう。

では逆に重力が強ければどうなるか。

骨や筋肉への刺激が強まり、日ごろの何気ない運動でもそれなりの筋肉の発達が促されるだろう。

追加

しかし、あるステータスは高確率で男性平均以下になるだろう。

「万物にその身を与える重力の意思よ、その御身の息吹 わが身に纏わせ我が意に従え。」

自分の体が少し軽くなった。

「……え〜」

エリック・シルフィールド八歳。
今日が誕生日。

まるで神様がプレゼントを与えたように今日一発目、重力魔法が発動できた。

「なんか達成感がない……けどまあいいや出来たんだし」

後は、重力系の魔方陣と刻印を勉強して完璧だ。

「上位三原則魔法 重力系」と背表紙に書かれた本を閉じ、本棚にちゃんと戻す。

「五年か、結構時間がかかったかな？」
八歳

これで特別な人だけ使えるという無属性魔法以外は使えた。
チート

そう、この世界に勉強するものとしてある魔術は——ん？
少し違うか、この世界で一般人に「知られている」魔術は使えた、
だ。

後は、自分の魔術を創っていくしかない。
オリジナル

すでに構想はあるし。（転生前の世界はアース地球と呼ぶことにした。）
アースでの妄想

ふふふ、私の妄想は尽きることはない。例えば神が敵として攻撃して
きたとしても、
Unlimited
私の世界に傷一つつけられる事と思うな！

ふう、落ち着け。

でもこれって遊びが勉強になってるような。

よく工学系の兄さんが「勉強は遊びみたいなもの」とか言ってたけど
ど今ならその気持ち分かるかもしれない。

……あーちよつと思いついたら目から涙が出てきちゃった。

思いついて泣きつてあるよね？

別れ、と言えば家庭教師として来ていたユアンさんともだ。

契約としては基本魔術「四原則魔法」ができるまで、だったし。

これ以上顔を青くされたくないのでもユアンさんには時間の面で、ダニエル父さんにはお金の面で申し訳ないけど五歳ぐらいまで付き合ってもらった。（それでも十分に驚いていたが）

さらに魔法の勉強をし続けていったらまた会えるのだからあんまり寂しさはない。

中学校の担任と卒業式で別れるような感じだろうか。会いに行けば会えると。

五歳といえば、外出できるようになりました。（ダニエル父さん付き）

外にでて市場に行ったときなんか「異世界に来た」ってことを強烈に実感させられた。

頭でわかってても体は拒否ってたのかな？

そこで出会ったこの世界での初めての友達、アレン・アルタイル。男性五歳。

知り合った理由はアレン君の父親、ガウディー・アルタイルさんはダニエル父さんと旧知の仲だった。

親が親なら、子も子でというのが、友達になるのにそう時間はかからなかった。

基本聞き手に回ることが多い私だから勝手に喋ってくれるのはありがたい。

馬鹿だが……。

分からないものはとりあえずたつ切ればいいという豪快な考え方である。

考えていないともいえるな。うん。

それはそれとして
まあ閑話休題。

「これでまた妄想を現実化させることが出来るかな？」

重力系に関して、実現させてみたい妄想は今のところ二つぐらいある。
——
けど、

「火属性はあるのに爆発がないんだもんなあ」

そう、火を魔術で作り出す事は出来た。

けど、魔法そのもので爆発を引き起こそうとは考えなかったらしい。

これがないと二つのうち一つはまだ実現不可。

やっぱり、オリジナル自分で創るしかないか。

……っと、

「エリック様、訓練の時間でございます」

背後から声をかけられるなんてもう慣れたものですよ。

五年前、両親に内緒でアンナさんに頼んだこと。

漫画でも良く出てくる脳の訓練を手伝ってもらっている。

「はい、わかりました」

そうして今日も、魔術の勉強部屋の地下室から出て朝日を浴びる。

今日の朝食はなんだろうかと考えながら。

内緒にしている意味はないけどね？

専属メイドと家庭教師を得た五年後（後書き）

はい、魔術に結構関わってきました。

すでに魔術の構想は練り終わっております。

一気に説明するのもあれなので少しずつ出していこうかと。

詠唱考えるときは顔真っ赤。

総合評価が二桁を超えました。

ありがとうございます。

こういう気持ちは忘れたくないですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8263y/>

神様の好奇心は人をも殺す

2011年12月3日19時51分発行